

親鸞仏教センター通信

2002.
January

2002年1月15日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒101-0043 東京都千代田区神田富山町28番地 風間ビル 2 階(仮事務所)

TEL. 03-5294-1332 FAX. 03-5297-8860

e-mail tomo-k35@k6.dion.ne.jp

創刊号

親鸞仏教センター設立の願い

親鸞仏教センター所長 本多 弘之

昨年の7月、首都東京に「親鸞仏教センター」という新しい研究交流機関が誕生した。

真宗大谷派が、現代に真向かいになって、時代の苦悩と宗祖親鸞聖人の願いとの接点を探り、現代人に真実の宗教そのものを語りかけるための、新しい視点と言葉を見いだそうとする試みである。

いま、現代の日本の状況のなかに、親鸞聖人の信念に依って生きることが、どういう意味をもち、いかなることを発言できるのか。社会に対して、いわゆる教義学(ドグマ)や文献学は、直接発言したりその問題を引き受けたりはしない。しかし、人間の救済を深く願うものが、本来の仏教である。仏陀釈尊はもちろんのこと、その教えを受けた無数の仏教者も、時代の民衆の苦悩とともにその時代社会を生きつつ、その苦難の状況に応答する仏教のあり方を求めて歩んできたのではないか。だから、単なる知的好奇心に答える論議ではなく、生活するものにとっての精神的栄養になるような信念の表現をもたなければならぬ。そのために、具体的な生きざまを逃げることなく、現代のさまざまな問題との接点に立って対話する。そこで、現代から生きた時代の課題をいただき、他力の信心によってその課題を、いわば吸収して栄養とする。そして、その課題に対する反応を現代の言葉で表現していく。そのことによって、個人が本当に自立することのできるような信念を提出し、同時代の人間が共通に立っている大いなる台地を、深く、そして緩やかな信頼関係として建設することがこのセンター設立の願いである。

親鸞聖人の流れを汲む真宗大谷派が、重い腰をあげて、苦悩の^{るつぽ}垣塙のような「首都圏」で、「現代」に学び、「現代」の問題関心とぶつかりながら、親鸞聖人の訴える人間解放の視点をいただき直し、新しい表現を探究しようとするのである。それは、もっとも精神的枯渇の激しい「現代」の困難な問題状況を生きている人々とともに考え、「浄土真宗」を、生きた時代関心のなかに開きたいからにほかならない。

諸兄の暖かいご賛助をお願いすることである。

親鸞仏教センター連続講座

「親鸞思想の解明」〈第1回〉

浄土—濁世を超えて、濁世に立つ—

本多弘之



本多弘之所長

当センターでは、「親鸞思想の解明」と題する連続講座を開催することになった。この講座は、各分野の有識者の方々を招き、親鸞聖人の思想に依って生きることの意味を所長・本多弘之が「問題提起」として発題し、親鸞仏教を基盤とした相互交流をとおして、現代社会の苦悩とともに歩む場を開こうとするものである。その第1回が、11月27日に東京国際フォーラム（有楽町）において開かれた。問題提起の一部を紹介する。（越部良一）

講座の開設に向けて

現代社会の生活空間には、いわゆる既成仏教が直接発言できる場所は、ほとんど見当たらない。それは仏教側に、時代社会に訴える情熱や努力がないということもあろうが、それよりも、時代社会の方に宗教を必要とする場面がなくなったのであろう。つまり、「非宗教的時代」になったのである。換言すれば、いわゆる「世俗的」なるもののみが、社会生活の圧倒的関心事となっているのである。「聖なるもの」とか「清浄なるもの」とか「人間を超えたもの」とかは、現代の文明社会の表面からは、ほとんど忘れられたのである。

しかし、人間が有限であり、自己の存在の意味に苦しむものであり、単に世俗の物質的豊かさで満足成就するものでないことは、時代が変わっても少しもかわらない人間の本質である。そこに、親鸞聖人の「非僧非俗^{ひそうひそく}」の人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こすべき課題があると思う。仏教思想を時代社会の関心の言葉で考え直してみたいのである。（本多弘之）

■ 宗教的信念がはらむ一つの危険性

人間はあちらこちらに欠点があり、そして心も弱い、身体も有限なのちであって、本当につたないのちでしかない。にもかかわらず、宗教的信念をいただくことにおいて、ある意味でこれでいいのだ、これでこのいのちが十分にいただけるのだ、というようになる。これが宗教的信念の特質でしょう。

しかし、宗教あるいは仏教というものを一人の人間がそのように信じたり受けとめたりするとき、本当は人間として生きるということは、共同体を生き、時代とともに念々にいのちを果たしながら、この有限ないのちを十全な意味として生きるという課題なのですが、それが何か個人レベルの満足の中に埋没し、完成してしまうという錯覚をもつ危険性があるのではないかと思うのです。

特に仏教の態度のうちには、お釈迦さま以来、この世の価値、美しさ、意味とかによって、かえって人間は苦しめられ引きずり回される。だからこの世の価値を超えたものに依って生きたいという要求があります。誰でもそういう要求にはどこかで触れているのだと思いますが、これは求道心、菩提心というものの一つの特質でしょう。

煩惱、欲とか怒りとか、この世の日常生活に関わって人間の心理が動かされる。そういうあり方を断ち切って、個体としての人間が、ある意味で十分な意味と静けさを取り戻すような生き方をしたい。それを実現するために家を捨ててこの世の一切の意味をいったん断ち切るという出家の精神が、ある意味で仏教の本流、主流を貫いています。

出家教団というものは、人里離れたところに共同体をつくり、そこでいわゆる^{じよくせ}濁世を、煩惱とともに

欲が絡み、恨み^{うら}が絡み、そこで情熱も湧くけれども悲しみも与えられる。そういう濁世という場をあえて遠ざけて、時代とか社会とは切り離された空間で人間としての独立を回復するという試みをするのです。

■ 親鸞聖人の願い

ところが、親鸞聖人という方は、そういう仏教の流れにある意味で批判して、それまで正統とされた仏教からは脱落する形で、より人間らしい共同体を生きる人間、あるいは実存共同体を生きる人間存在としての満足というものを求められた。その象徴的な言葉が「非僧非俗」という言葉です。つまり、出家共同体である僧（サンガ）ではなく、そして俗でもない、単に世俗的価値に埋没して生きるのでもない。そうした「非僧非俗」という言葉のもとに親鸞の名のりをあげられたのです。

だから今、親鸞という名前前で現在に立ち向かうということの意味は、特殊空間で、特殊体験のごとき宗教経験をもって人間を救うというあり方ではなく、時代とともに、社会の苦悩とともに、つまり濁世の只中に生きながら、しかし、単に濁世の苦悩に引きずり込まれて埋没しているのではない、そういうあり方を探し、その根拠を見定めることであろうと思うのです。それが、親鸞という方の意味であり、願いであろうと私は信じております。

この親鸞聖人の願いに触れて、親鸞聖人の教えをいただいて生きる我らとしては、この4000万人の首都圏というものを見捨て、静かなのがいい、古いのがいいといったように生きることはいけません。東京は、生活空間としては、単に人間が静か

に生きるということからすれば、こんなやっかいな場所はないでしょう。しかし、静かな生きやすい場所で宗教体験を持とうとする方向を取るなら、それは親鸞聖人が批判した傾向性ではないかと思うのです。

罪惡深重の濁世の中で、自分自身もその罪の共同体をいっしょに生きているその中で、どれだけ辛くとも、どれだけ汚れようとも、あるいはそれによって自己を失いそうな人生になるかも知れないけれども、そういう中に立って、しかし、失われない自己を回復すること、悲しみ苦しみもがいているだけではない立場を回復することが、親鸞という人がこの世に投げた大事な人間の生きざまではないかと思うのです。

困難至極ではあるけれども、あるいはつぶされてしまうかも知れないけれども、この首都圏で本当に現代と対面して親鸞聖人の使命を表現し、そしてそのことを本当に生きて伝えるような営みが継続されるべきだというおmoiがあるのです。

一人ひとりの人生は一人ひとりの場所ですから、他人の場所に入るといふわけにはいかない。それぞれの専門分野にはそれぞれの課題があると思うのです。けれども、そういうものが投げかけている時代の問題と無関係に宗教空間があるのではなく、その辛くて矛盾多き問題とともに歩むような原理、展望といったものを本当に切り開いていくことができるなら、親鸞聖人の願いというものは、決して単なる800年前に亡くなった方の個人的おmoiではなく、時代とともに生き生きとした人間解放の原理として伝え得るのではないかと、そういうふうに私は深く信じているわけです。（文責：センター）



「親鸞思想の解明」（有楽町の「東京国際フォーラム」で）

力の宗旨を乱ることなかれ。よつて、故親鸞聖人の御物語のおもむき、耳の底に留まるところ、いささかこれをしるす。ひとえに同心行者の不審を散ぜんがためなりと、云々

竊回愚案、粗勘古今、歎異先師口伝之真信、思有後学相統之疑惑、幸不依有縁知識者、争得入易行一門哉。全以自見之覚悟、莫乱他力之宗旨。仍、故親鸞聖人御物語之趣、所留耳底、聊注之。偏為散同心行者之不審也云々

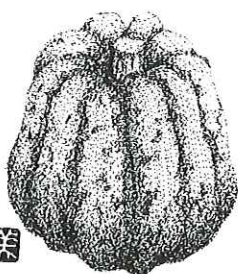
(原文は漢文のため、書き下し文を列記した。書き下し文は、東本願寺発行の『真宗聖典』を参照した)

語 註

- ①【竊か】公なる本願の仏法を私的に了解したということを表す謙讓表現。(対人関係における謙讓表現ではない)
- ②【真信】個人が自分で起こす心ではなく、如来の願いに響いた心。
- ③【有縁の知識】仏法に触れる縁となり、救いの導きをしてくださった直接の師。
- ④【易行】念仏(南無阿弥陀仏)のこと。如来の本願が一切衆生を救うために選び取った行為。いつでも、どこでも、だれでも行え、救済に努力を必要としないので「易」という。
- ⑤【他力】如来の本願力。自我心を破って、存在の根源から人間を目覚ましめるはたらき。
- ⑥【同心行者】本願の呼びかけに目覚めた求道者。

補 注

*【本願】阿弥陀如来が一切衆生(生きとし生けるものすべて)を救いとうとする願い。



宗



親鸞仏教センター(仮事務所)

- 打ち合わせを重ねる。
- 7・25 第1回センター運営拡大検討会(於・千代田区ミュード)
 - 8・1 人事発令(武田定光囑託研究員、本多雅人囑託研究員、越部良一囑託研究員、三浦節夫客員研究員、藤谷真之書記)
 - 8・6 センター仮事務所開き
 - 8・25 第1回研究会議(第2号の編集、新事務所の検討、業務内容の具体化等に向けた協議が始まる。以降、12回の研究会議を開催)
 - 8・31 『シンニョ』第2号への執筆依頼
 - 9・3 新事務所建築の現地説明会(文京区向丘)
 - 9・6 第1回「センター通信」編集会議。以降、検討を重ねる。
 - 9・19 有識者との懇談会(於・東京ステーションホテル)。以降、有識者並びに研究学術機関等への挨拶、懇談を順次開催。
 - 9・28 第1回「聖典の試訳」(現代語化)数異抄研究会。以降、4回の研究会を開催。
 - 10・3 新事務所起工式並びに近隣住民への挨拶、新事務所の工事着工。
 - 10・19 現代と親鸞の研究会⑥弁護士・高城俊郎氏(於・東京ガーデンバレー)
 - 10・22 三浦内局発足(三浦崇宗務総長)
 - 11・1 人事発令(藤原正寿研究員)
 - 11・11 第1回「親鸞思想の解明」連続講座(於・東京国際フォーラム)。以降、月1回開催。
 - 12・25 第2回センター運営拡大検討会(於・文京区向丘)

『聖典の試訳』（現代語化）

「聖典の試訳」（現代語化）研究では、現代人がたやすく教えの言葉に親しめるために『真宗聖典』の試訳（現代語化）を試みている。まず初めに、歎異抄の現代語化を試みたい。なぜ歎異抄なのか？ 歎異抄の現代語訳は他にもたくさんあるではないか？ という疑問もある。それはやはり、親鸞聖人のことばが生形の形で表現されているものが歎異抄だと思われるからである。時代を超えて、我々にインパクトを与え続けている書物が歎異抄である。

また、現代語訳では、現代人に了解しやすいことばを用いることで、仏教書という敷居をでるだけ下げた訳を心がけた。首都圏東京のリズムはかなり速い。この速さに応じた、軽快さと容易さを大事にし、「教えの言葉（原典）」に触れる契機にしたいと願っている。ここに成果の一部を掲載する。

（武田定光）

『歎異抄』試訳〈序〉

原文

①ひそ 竊かに愚案をめぐらして、ほぼ古
今を勘うるに、先師の口伝の真
信に異なることを歎き、後学相統
の疑惑あることを思うに、幸いに
有縁の知識に依らずは、いかでか
易行の一門に入ることを得んや。
まったく自見の覚悟をもつて、他

現代語訳

私が思うに、親鸞聖人がいらつしやったところと今とをくらべてみると、聖人が直接教えてくださった信心と異なることがあるのは、まことに悲しいことである。

それによって、教えを学び受け継ぐ者たちに、疑いや惑いが起こりつつある。

よき師に出遇うことがなければ、本願念仏の教えには入ることができないであろう。自分の勝手な考えで、他力の教えをけつして乱してはならない。

そこで、亡き聖人からお聞きして忘れられないお話の要点を書き記しておこう。

これは、ひとえに同じ志の求道者が陥りやすい不明な点を除くためである。

親鸞仏教センター

設立の経緯とその後の動き

（2000・7～2001・12）

■2000年

- 7・1 真宗大谷派宗務所企画室（京都）内に「首都圏学事構想企画推進会議」（以下、「推進会議」）が発足。座長に高浜純雄参務。第1回推進会議総会（於・宗務所。以後、部会に分かれて、第1部会（主査に本多弘之氏・東京会場）では、学事施設設置の趣旨・施設名称・事業内容等を、第2部会（主査に藤坂初裕東京宗務出張所長・京都会場）では、法規整備・運営体制・施設設置・予算等の協議が始まる。現代と親鸞の研究会①社会評論家・芹沢俊介氏（於・ホテル西洋銀座）宗務所内に推進会議作業プロジェクト（関係部門次長・主事）を結成。以降、検討作業が始まる。
- 11・2 第2回推進会議総会（於・宗務所）。情報誌の編集方針、運営体制等の検討。
- 11・9 現代と親鸞の研究会②社会評論家・芹沢俊介氏（於・東京国際フォーラム）現代と親鸞の研究会③文芸評論家・山城むつみ氏（於・日暮里サニーホール）
- 12・21
- 10・25 宗務所内に推進会議作業プロジェクト（関係部門次長・主事）を結成。以降、検討作業が始まる。
- 9・1
- 10・25

■2001年

- 2・23 現代と親鸞の研究会④哲学者・竹田青嗣氏（於・日暮里サニーホール）
- 3・23 第3回推進会議総会（於・宗務所）。首都圏学事構想「総計画案」の検討。情報誌「EYE」創刊号を刊行。
- 4・15 首都圏学事構想「総計画」を本越樹宗務総長に報告。
- 4・28
- 5・7 現代と親鸞の研究会⑤神経内科医・平山恵造氏（於・東京国際フォーラム）
- 6・13 宗会において、「親鸞仏教センター条例」「親鸞仏教センター資金に関する特別措置条例」等、親鸞仏教センター（以下、「センター」）関連条例が可決される。
- 7・1 センター設置
- 7・2 人事発令（本多弘之所長、長谷岡英信事務長、日野隆文主事）
- 7・23 仮事務所（千代田区神田富山町28・風岡ビル2階Ⅱ写真）での業務開始。第1回新事務所（東京大谷会館跡地…文京区向丘1-13-7）建築打ち合わせ会。以降、

現代と親鸞の研究会・第1回

現代経済社会から生じる 人間の行動基準

弁護士 高城俊郎



弁護士 高城俊郎氏

この研究会は、各界の最先端で活躍される有識者をお招きし、専門分野における現代の諸課題について問題提起をしていただこうというものである。このような有識者との対話交流をとおして、現代人の苦悩の根源を明らかにし、親鸞思想に立って共有できる方向を、現代のことばで生みだしていこうと試みるものである。

第1回は、10月19日、東京ガーデンパレス（お茶の水）において、法曹界から高城俊郎氏（小池・高城総合法律事務所所長）を迎え、お話をいただいた。その一部を紹介する。
（本多雅人）

■ 経済活動の虚業化

近代社会は、19世紀から20世紀にわたり、自由な意思で自己決定し得る人間観と、経済活動によって人間を貧困から解放しようという価値観によって出来あがってきたと考えています。ところが近年、コンピューター技術の飛躍的な進歩によって、経済活動のあり方、人間のあり方が大きく変わってきたと思います。コンピューターは、情報管理・大量処理を容易にし、かつ情報の瞬時伝達が可能となったため、企業のみならず人間もコンピューターによって管理される社会になっていると感じられます。

この結果、金融については、国際化と巨大化が進み、銀行を通じての間接金融から国際的市場を通じてのコマーシャルペーパー等による機関投資家からの直接金融へと変化しています。これが可能なのは、企業に投資して安心であるかどうかという情報を

持っていなければならず、コンピューターによる情報がそれを与えることを可能にしたということです。この情報は、国際的な企業評価基準となっており、その情報によって企業が倒産に追い込まれるという事態も生じさせています。また、金融市場が、企業の存続等に決定的な影響力を持つことになると、金融を商品とする経済も出現して経済活動の中心となる現象も出てまいります。率直に見れば、^{きよぎよう}虚業というような社会にどうも重点が移っているのではないかと感じられます。

■ 市場経済原理の矛盾

現在、市場経済ということが強く主張されています。市場経済というのは、ユーザーが支配する経済であると言われています。企業は、常に顧客が何を求めているか、それを企業としてどう提供できるかということが主な活動目的になるわけですから、これが他よりどれだけ優れているかという差別性、選別性を常に合言葉にし、革新し続けていくわけです。企業にとっては勝ち残りたいと考えるわけですし、顧客は便利なもの、より優れたものを求めていくというように、すべてが欲望をどう実現していくのかという、欲望実現サイクルの繰り返し状態の中に人間が置かれてしまっているのです。

市場経済が、一面においては非常に輝かしいかたちで、努力をした者は報われ、経済的成功を収めるという面を持っていますが、他面においては、当然競争ですから優勝劣敗主義というかたちで敗者を生み出します。市場経済の推進を唱える人たちにとっても、現状ではこの敗者を救済するシステムを持っていないことを認めざるを得ないのです。ですから、

これをどう解決していくかが21世紀の課題であると言われています。

■ 虚像化する人間像

いわゆる努力主義は良いことであると広く信じられています。しかし、これを社会現象から見た場合、人々にとっては、大変苛酷な状況に置かれていると思われまゝ。なぜなら、負けた者に対して、努力をしなかった、努力が足りなかったとして責任を押しつけるための理論として通用していると感じられないからです。自己責任と言われますが、努力主義の裏返しとしての自己責任という言葉のもとに、敗者を納得させるための理論でしかないのです。しかも、勝者と共に敗者に関係のない者までが、敗者に対して苛酷なまでに非難を加えるという、極めて厳しい現代の社会になっているのではないのでしょうか。これは常に誰かの責任を追求していくことによって、自己の正当性を保とうという心理状況で人間が動いているのではないかと思います。

近年の経済的な破綻は、家族の崩壊も引き起こしています。また、年間3万人を超える自殺者のうちの60%以上が中高年で占めるというのは、明らかにリストラの問題と関係していると思います。なぜ自殺をするのかという共通の原理としては、社会的な評価を絶対的価値観とする現代人にとって、否定的

価値判断を受けることは自分破綻であり、自己崩壊をおこさざるを得ないのだということです。要するに、現代人はどういう行動価値観で動いているかという、自己が他人あるいは社会からどういう評価を受けているかということが、少なくとも都会における人間像の基本的な価値観になっているのではないのでしょうか。だから虚像を自己と考えて、本来の実像、本物のところに焦点が合っていないのではないかという感じがいたします。

現実の仕事を含めた生活をどう生きていくのかに関しては、まだまだ私にとってはこれからの課題であると考えていますが、親鸞聖人の「非僧非俗」の宣言が、私ども現代社会の最前線にいる者にとって、親鸞聖人の教えを率直にいただける原点だと思っています。高い立場でものを言うのではなく、俗の立場に立ちながら、俗とまみれて欲望の世界に埋没するのでもない生き方を示されたものといいただいております。
(文責：センター)

高城 俊郎（たかぎ としろう） 弁護士

1945年生まれ。64年中央大学法学部法律学科入学の後、67年司法試験合格。68年中央大学卒業後、東京弁護士会に所属し、72年、中央区銀座に「高城法律事務所」を開設。2000年9月から「小池・高城総合法律事務所」所長として現在に至る。



「現代と親鸞の研究会」（お茶の水の「東京ガーデンパレス」で）

親鸞仏教センターの新築工事始まる

昨年7月、東京都千代田区神田に開設した親鸞仏教センター（仮事務所）の新たな移転先である東京大谷会館跡地（文京区向丘1-13-7）に、本年2月の完成をめざして事務所の新築工事＝写真＝が進められています。（設計：（株）集工舎建築都市デザイン研究所、施工：（株）太陽建設）

宗派所有のこの跡地（267,57㎡）に建築中の新事務所は、オープンギャラリー、研究室、会議室、事務室など、センターの研究交流業務に必要な最小限の機能を備えた鉄骨造平屋建て（177,12㎡）になります。



『aňjali』第2号刊行される

情報誌『aňjali』第2号＝写真＝が本年1月15日に刊行されました。本誌では、経済・社会・思想・医療・教育・科学・宗教など多様な分野で活躍される方々に、それぞれの分野での課題やその苦闘をご執筆いただき、「現代の課題とは何か」を多くの人々とともに共有したいと願っています。皆さまからのご感想、ご意見をお待ちしております。



●センタースタッフの紹介（2002年1月15日現在）

所 長	ほん だ ひろ ゆき 本 多 弘 之
	1938年生まれ。東京大学農学部林産学科卒業。大谷大学大学院博士課程（真宗学）満期修了。元大谷大学助教授。真宗大谷派摂講、本龍寺住職。
研 究 員	ふじ はら まさ とし 藤 原 正 寿
	1963年生まれ。大谷大学大学院博士課程（真宗学）満期修了。前教学研究所研究員。大谷大学真宗総合研究所嘱託研究員。
嘱託研究員	たけ だ きだ みつ 武 田 定 光
	1954年生まれ。大谷大学大学院博士課程（真宗学）満期修了。真宗大谷派摂講、教学研究所嘱託研究員、因速寺住職。
嘱託研究員	ほん だ まさ と 本 多 雅 人
	1960年生まれ。中央大学文学部史学科（東洋史学）卒業。元関東国際高校社会科教員。蓮光寺住職。
嘱託研究員	こし べ りよう いち 越 部 良 一
	1961年生まれ。一橋大学社会学部卒業。早稲田大学大学院文学研究科博士課程（哲学）満期修了。法政大学・日本大学等非常勤講師。
客員研究員	み うら せつ お 三 浦 節 夫
	1952年生まれ。東洋大学大学院社会学研究科博士課程（社会学）満期修了。東洋大学井上円了記念学術センター専任研究員（教授）。
事 務 長	は せ おか ひで のぶ 長谷岡 英 信
主 事	ひ の たか ふみ 日 野 隆 文
書 記	ふじ たに まさ ゆき 藤 谷 真 之

あ と が き

記録的猛暑となった昨年の7月、東京都神田の地にセンター（仮事務所）が開設されて早6カ月。3名から産声をあげたセンターも徐々にスタッフを整え、11月からは常勤研究員も加わって、現在は客員研究員を含め9名となった。この間、識者との懇談を進めながら、内部では所長を中心に、宗派の学事施設設置の願いを繰り返し確認し、実動内容を整えてきた。一方、本年2月に完成予定の新事務所の開設に向けて、限られたスペースでの機能面の検討も行ってきた▼センターの諸活動を略記すると、既刊の『aňjali』（年2回）では現代の最先端で活躍される方々にその苦闘をご執筆いただき、親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」では親鸞聖人の教えが現代とどこで切り結ぶことができるのかを、所長の問題提起をとおして探っていく。また、『『聖典の試訳』』では当面『歎異抄』の現代語化を継続研究し、「現代と親鸞の研究会」では識者との対話交流を図っていく。これらの活動を柱に、親鸞思想を核として現代人の苦悩と時代社会の諸課題を共有できるネットワークを築いていきたい。今回はその歩みの一端を本通信に報告した。今後、研究誌『現代と親鸞』（仮称）にその詳細を掲載したいとも考えている▼本通信（年4回発行予定）をとおして新たな交流が生まれれば幸いである。皆さまの心からのご支援をお願いするものである。（長谷岡）